

〔PBLの風と土 第26回〕

大学での活動が地域における学習機会に

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、連載5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題しています。

1. 視察に留まらない対話と交流の旅に

前回の本連載（[第25回](#)）で触れたように、3月5日から3月9日にかけて、アメリカ合衆国のインディアナ州の[インディアナ大学・パデュー大学インディアナポリス校（IUPUI）](#)に訪問する機会を得た。コロナ禍により、もっぱら海外との交流はオンラインで行われてきたこともあって、少なくとも筆者にとっては4年ぶりの海外渡航となった。前回は記したとおり、渡航にあたっては2つの研究プロジェクト（立命館大学の北出慶子先生を代表者とするJSPS科研費19K00723「[日本語支援者の学び解明と促進を目指した多文化サービスラーニングの開発](#)」および筑波大学の唐木先生を代表者とするJSPS科研費21K18479「[初等中等高等教育におけるパートナーシップに基づくサービスラーニングの実装化](#)」）の支援を得た。多くの支援を得たこともあり、前回の予告のとおり、今回から複数回にわたりIUPUI訪問の報告を重ねていく。

訪問したメンバーは唐木清志先生（筑波大学）、石筒覚先生（高知大学）、秋吉恵先生（立命館大学）、宮崎猛先生（創価大学）、そして筆者の5名である。5名に共通するのは日本サービス・ラーニング・ネットワーク（JSLN）の運営メンバーかつ、唐木先生が研究代表者となっている科研費の研究分担者という点にある。もっとも、当該の科研費はJSLNの活動の充実を図る中で獲得できたものである。すなわち、JSLNが目指す「教育機関と社会の往還による知と経験、理論と実践との再統合を進める

サービス・ラーニングの広がりと発展」を具体化する中で応募し、採択に至った研究プロジェクトである。

今回の視察にあたって、全体のコーディネートをいただいたのは、本連載でも何度も取り上げている[ロバート・ブリングル先生](#)である。ブリングル先生はIUPUIのサービスラーニングセンター設立時のセンター長であり、サービス・ラーニングの理論の一つであるSOFARモデルの開発したチームのメンバーでもある。ここで唐木先生が代表研究者となっている科研費について、公開されている概要から研究の目的を確認すると「パートナーシップに基づくサービスラーニングの実装化に向け、プログラム開発・評価モデルを確立するとともに、モデル実施を可能とする方法を解明する」と掲げられていることが確認できる。ここからも、今回の視察において、ブリングル先生の協力が得られたことは、研究の進展と共に、今後のJSLNの取り組みの充実、さらには日本のサービス・ラーニングの発展に寄与するものと確信している。

今回はブリングル先生に加えて、IUPUIの教養学部（School of Liberal Arts）の日本語プログラム（Program in Japanese Studies）の主任（Director）の[栗山恵子先生](#)の協力も得ることができ、対話と交流の旅となった¹。栗山先生とは今回のIUPUIへの訪問計画を具体化する中で新たに関係構築が図られた。手元の記録によれば、2022年12月16日のJSLN理事会の際、IUPUIの日本語コースの存在と、そこで勤

表1：視察の行程

日	時間	場所	内容	対応(敬称略)	写真
3/5	18:00～20:00	SAKURA	IUPUI日本語プログラム(JPS)の取組内容と日本の大学でのサービス・ラーニングの状況などについての懇談	栗山 恵子 (IUPUI, JPS主任・特任准教授) ハリス 田川泉 (IUPUI, JPS講師) 河野 錦 ゆりか (IUPUI, JPS講師)	①
	9:30～11:00	The Legacy Center	IUPUI健康・人間科学部による地域連携事業「Physically Active Residential Communities & Schools(PARCS)」見学	Christopher Rash (IUPUI, PARCS主任・School of Health & Human Sciences講師)	②
3/6	13:00～15:00	IUPUI [Joseph T. Taylor Hall]	AAC&U (アメリカ大学・カレッジ協会)のLEAPイニシアティブのもとでのIUPUIの「RISE」プログラムの紹介	Jerry Daday (IUPUI, Executive Associate Dean, Institute for Engaged Learning) Charity Bishop (IUPUI, Richard M. Fairbanks School of Public Health講師) Stephanie Leslie (IUPUI, Office of International Affairs留学担当主任)	③
	15:15～15:15	IUPUI [Joseph T. Taylor Hall]	1993年設立のインディアナ・キャンパス・コンパクトを2022年に改組したCommunity-Engaged Allianceの紹介	Elijah Howe (Community-Engaged Alliance事務局長)	④
	16:30～18:00	IUPUI [Joseph T. Taylor Hall]	Robert G. Bringle先生と共に、SOFARモデルをテーマにZoomミーティングを用いて意見交換	Patti H. Clayton (PHC Ventures顧問、ノースカロライナ大学グリーンズボロ校 Institute for Community & Economic Engagement客員上級研究員)	⑤
	10:00～12:00	Arsenal Tech High School	IUPUI教育学部による地域連携事業「Urban Teacher Education Program (TEP)」見学と高校独自の取組紹介	Monica Medina (IUPUI, School of Education特任准教授)	⑥
3/7	14:00～15:30	IUPUI [Business/SPEA Building]	IUPUI教育学部による地域連携事業「Collaborative for Equitable and Inclusive STEM Learning」の分析枠組解説	Cristina Santamaria Graff (IUPUI, School of Education准教授) Jeremy Price (IUPUI, School of Education助教) Maxim Bulanov (IUPUI, Educational Program Specialist, School of Education)	⑦
	17:30～19:00	National Institute for Fitness & Health	IUPUI健康・人間科学部による地域連携事業「Adapted Movement Programs(AMP)」見学と意見交換	Katie Stanton-Nichols (IUPUI, AMP主任、School of Health & Human Sciences准教授)	⑧
	9:30～12:00	The Sam H. Jones Center	当初はチャータースクールでの実践を現地でどう予定も前日の発砲事件で地域連携オフィスでの懇談に変更	Jim Grim (IUPUI, University/Community School Partnershipsディレクター)	⑨
3/8	14:00～15:30	IUPUI [Informatics & Communications Technology Complex]	IUPUI情報系学部が2015年に開始した高校生向け事業「Informatics Diversity-Enhanced Workforce(IDEW)」紹介	Vicki Daugherty (IUPUI, Luddy School of Informatics, Computing & Engineeringプログラムマネージャー)	⑩
	16:00～19:00	Hamilton East Public Library	IUPUI教養学部JPSによるフィッシャーズ地区の図書館での科目「Individual Studies in Japanese」の見学	栗山 恵子 (IUPUI, JPS主任・特任准教授) ハリス 田川泉 (IUPUI, JPS講師) 河野 錦 ゆりか (IUPUI, JPS講師)	⑪
3/9	11:00～12:00	IUPUI [Eskenazi Hall]	IUPUI芸術系学部のビジュアル・コミュニケーション・デザインに関する修士プログラムでの取組の紹介	Youngbok Hong (IUPUI, Visual Communication Design主任・Herron School of Art & Design教授)	⑫
	13:00～15:00	IUPUI [Business/SPEA Building]	IUPUI教養学部が受け入れた米国内のNPO「FHI360」による英語教師25名向けの国際ワークショップ参加・傍聴	栗山 恵子 (IUPUI, JPS主任・特任准教授) Robert G. Bringle (IUPUI, サービスラーニングセンター設立者) Matthew Hume (IUPUI, Director, Educational Programs 主任・教授)	⑬

務されている日本人教員のお一人として栗山先生の在籍が明らかとなり、ブリングル先生への協力とあわせて、栗山先生との懇談も働きかけていこう、という運びになった。そして既にIUPUIを退職されたブリングル先生にはノースカロライナ州から駆けつけていただいて全体のコーディネートをいただきつつ、栗山先生には他の日本語コースの先生方との調整もいただいて授業の見学も含めて対応いただけることになった、という具合である。

2. 写真で辿るハイライト

現地で過ごした5日間の行程を表1にまとめた。前述のとおり、5人での視察ではあったが、年度末の出張であることと全国各地からの参加ということもあって、宿泊先だけは同一箇所にするという原則のもと、日程面での合流・離脱は互いに柔軟に受け入れることとした。ちなみに筆者は3月5日の午後にインディアナポリス空港に到着し、3月9日の夕方にインディアナポリスを出発するという旅程とした。以下、表1に基づいて、13枚の写真から、それぞれの訪問先の特徴について簡単に紹介していく。

1日目) 日本食レストラン「SAKURA」で懇談

初日はIUPUIの日本語コースの先生方との懇談となった。日本からのメンバー5名、そして

IUPUIの日本語コースからは栗山先生に加えてハリス(田川)泉先生、河野(錦)ゆりか先生の3名が参加となった。「日本から来られた方を日本食レストランでお目にかかるのも不思議な感じですが」といった感覚を日米双方に覚えたようであったが、初対面ながらも和気藹々と互いの実践や関心を語り合った。とりわけ現代の学生の気質について日米での共通点・相違点について探り合ったのが印象的だった。



写真1：日本食レストラン「SAKURA」にて

2日目) 地域と大学の確かな関係構築を実感

2日目は朝からアーセナル技術高校に隣接するコミュニティセンター ([John Boner Neighborhood Center](#)、1974年に住民が設立) 内のジムに伺い、IUPUIの健康・人間科学部の地域連携事業「[Physically Active Resi-](#)



写真2：JPモルガン・チェース銀行が支援するジム

dential Communities & Schools (PARCS)」での学生と教員によるフィットネス部門の運営状況について、[クリス・ラッシュ先生](#)と学生からお話を伺った。その後、IUPUIのキャンパスに向かい、参画型学習機構のジェリー・ダディー副機構長やサービスラーニングセンターの暫定センター長を務めるチャリティ・ビショップ先生らから「RISE」(Research, International experiences, Service Learning Experiential Learningの頭文字から命名)プログラムのもとの[High Impact Practices \(HIPs\)](#)を展



写真4：CEAのホウ事務局長とブリングル先生の初対面



写真5：TRESは「トゥリーズ」と発音することを認識



写真3：IUPUI「RISE」は急学状況から脱却が可能と説明

開しているとの説明があり、現在のIUPUIでのサービス・ラーニングの位置づけについて理解を深めた。その後、サービス・ラーニングの推進のための学長連合「[キャンパス・コンパクト](#)」のインディアナポリスの地域支部を2022年に改組して設立された[Community-Engaged Alliance \(CEA\)](#)の[エリア・ホウ事務局長](#)に取り組みの紹介をいただいた。そして夕方には、ブリングル先生と共にSOFARモデルの開発者の1人である[パティール・クレイトン先生](#)とZoomで対話し、改めてSOFARモデルの活用を通じた組織間関係の構築 (inter-organizational relationship) が重要だと確認することができた。

3日目) 高校生や住民と交わる学びの場に直面

3日目は朝から[アーセナル技術高校](#)を訪問し、IUPUI教育学部の[モニカ・メディナ先生](#)から、20年以上にわたって多様な人種や経済格差などを前提とした都市部の教育環境への批判的思考のためにサービス・ラーニングを展開してきたことについて案内いただいた。その後、コカ・コーラ社の工場をリノベーションした地区

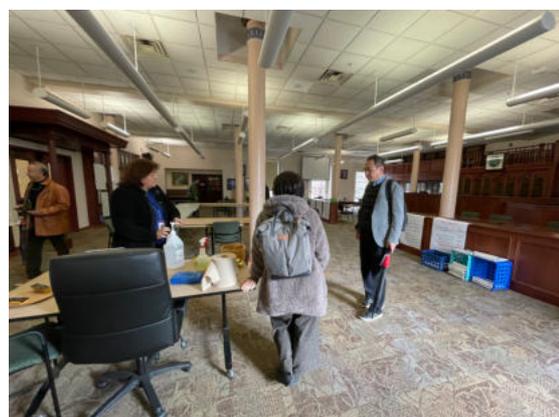


写真6：高校内の模擬法廷での授業運営の様子を体感



写真7：教育学部のラーニング commons での対話



写真8：スペシャルオリンピックスを目指す方の指導もを訪れ、フードコート (The Garage Food Hall) で昼食を取った後、IUPUIのキャンパスに向かった。午後には教育学部のラーニング commons にて、地域連携事業「[Collaborative for Equitable and Inclusive STEM Learning \(CEISL\)](#)」において、SOFARモデルとブルーノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論における「Links & Knots」(Latour, 1999)、そしてタニア・ミッチェルとマーク・ラッタによる批判的サービス・ラーニング (Mitchell, 2007; Mitchell & Latta, 2020) の3つの理論的観点から、変容的な関係構築への分析・設計に取り組んでいることを紹介いただいた。そして夕方から夜にかけては、IUPUIが建物を所有しNPOが運営するフィットネスセンター「The National Institute for Fitness and Sport (NIFS)」にて、障害のある人への運動機能向上のサービス・ラーニングとして健康・人間科学部が展開している地域連携事業「[Adapted Movement Programs \(AMP\)](#)」を見学した、AMPの主任であるケイティー・ニコルズ先生と意見交換した。

4日目) 大学と地域との組織的な関わりを実感

4日目は前日にインディアナポリスで起きた発砲事件により朝の予定が変更になった。当初は当初は地域のチャータースクール ([Matchbook Learning at Wendell Phillips School 63](#)) に伺いIUPUIの[Music Technology Academy](#)の取り組みなどについて懇談の予定だったが、学校が一斉閉鎖となったため、2日目のプログラムから随行いただいてきたジム・グリム氏がディレクターを務めている地域連携オフィスにて、それまでの視察先に関する意見交換を行うこと



写真9：2012年にIUPUIは地域の学校との協議会を設立

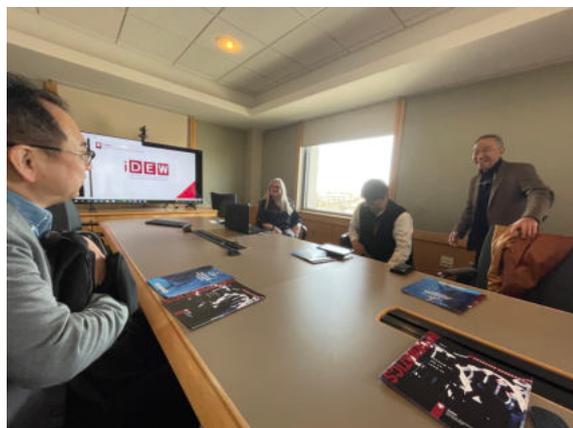


写真10：iDEWにもJPモルガン・チェース銀行が支援



写真11：公共図書館ゆえ可能な日本語交流授業を見学

とした。午後は情報系の学部による中高校生向けのキャリア教育プログラム「[iDEW](#)」について[ヴィッキ・ドーアティ主任](#)から説明を受け、学生たちがアシスタントとなって相互にITスキルの向上を図っているとのことであった。そして夕方はインディアナポリス郊外の[フィッシュヤーズ地区の図書館](#)に向かい、現地駐在員の家族などを対象としたIUPUIの日本語コースでのサービス・ラーニング科目 (EALC-J 498: Individual Studies in Japanese) を見学の後、先生方と懇談させていただいた。

5日目) 構造的な社会問題に接近する実践を議論

5日目は筆者にとって滞在最終日だった。チェックアウトの後にIUPUIに向かい、[ヨンボク・ホン先生](#)から芸術系学部ビジュアル・コミュニケーション・デザインに関する修士プログラムの事例として、[認知症患者の介護](#)、[電動スクーターの導入による都市モビリティの向上](#)、[ラテンアメリカ移民の抑うつ防止](#)、[季節労働の農民への健康調査のニーズ把握](#)など、暗黙知の形式知化の取り組みを紹介いただいた。午後には米国内のNPO「[FHI360](#)」の支援のもとで行われたIUPUI教養学部による外国語としての英語 (English as foreign language: EFL) 教師25名向けのサービス・ラーニングをテーマとした国際ワークショップ ([Using Service Learning to Teach 21st Century Skills to English Language Learners](#)) の第7分科会 (Making the Shift to a Service-Learning Approach) に参加し、栗山先生の話提供やブリングル先生のコメントなどを傍聴した。終了後、筆者は空港へと向かい、帰路に就いた。

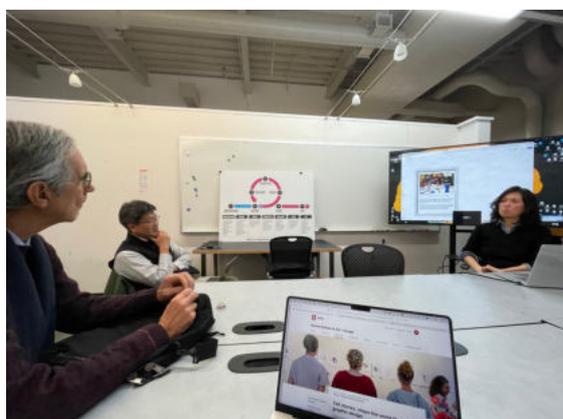


写真12：サムソンで製品開発等に従事した[ホン先生](#)

3. SLからCEへ

今回の視察の素朴な感想は、IUPUIでのサービス・ラーニング (SL) はコミュニティ・エンゲージメント (CE) としての意義が強調されていた点である。もちろん、学生の学びと成長の方法論としてはSLである。ただし、そうした教育法を推進する上で、大学は教育を通じた社会貢献を展開している自覚と責任のもとで各種の取り組みがなされていると確認できた。そこには、1969年にインディアナ大学とパデュー大学が個別に設置していたインディアナポリス校の合併によりIUPUIとして運営してきた枠組みを解消し、[2024年秋には独立した2大学とする](#)、といった動きも無関係ではなからう。

こうした関心のもと、5日目に傍聴したワークショップの報告記事 ([2023年6月13日](#)) に目を向けてみよう。その中で、ブリングル先生の発言から、現在のサービス・ラーニングは「奉仕」の精神から「地域社会への参画と協力」への進化」の傾向にある、と記されている²。本連載[第10回](#)で紹介したアンドリュー・フルコ先生の指摘を用いるなら「ために (for)」から「ともに (with)」への移行である。すなわち、対等なパートナーシップが重要ということになる。

もっとも、SLからCEへの関心の移行や重点化はIUPUIだけの傾向ではないだろう。今回、2日目に紹介を受けたHIPsという概念は、2005年から2018年にかけてアメリカ大学・カレッジ協会 ([AAC&U](#)) が展開した[LEAP](#) (Liberal Education and America's Promise) キャンペーンにより「市民的・経済的の両面でより広範な社会のニーズを学業につなげられるよう学生のレディネスを育む」³ ([Schneider, 2021, p.ix](#)) こと



写真13：[24ヶ国から25名のEFL教師が参加した](#)

を各大学に呼びかけられたものである。ちなみに本連載では国際サービスラーニング・地域貢献学会と訳してきた国際学会「[IARSLCE](#)」は、2001年にカリフォルニア大学バークレー校で第1回大会が開催された後、2005年に組織化され、2007年に法人化された。ここに、HIPsの概念が普及する過程で、教育法としてのSLと、その推進役となる大学が果たす使命としてのCEの双方が重視されたと見てとることができる。

4. 地域と時代に向き合う意義

以上、今回は5日にわたるIUPUIの視察内容について、その全体像をまとめてみた。次回からは訪問を通じて触れた理論や実践について、個別に取り上げていく。ちなみにJSLNは、2023年10月21日に公開研究会「[サービスラーニングに関する米国調査報告会](#)」を開催する。そし

て、筆者も発表者の1人である。そのため、今回はこの公開研究会での議論も盛り込みたい。

ちなみに前回の結語において「批判的人種理論 (critical race theory)」に触れた。それに関連する事柄として、IUPUIで撮影した2枚の写真を紹介して結びとしよう。1つは5日目の昼に泉先生にご案内いただいて拝見した教養学部の中庭にある日本語コースの先生方が植樹された広島での被爆銀杏から育てられた苗木 ([2021年4月16日に植樹](#)) で、もう1つは渡り廊下 (sky walk) に掲げられた [\[Black Lives Matter\] のメッセージ](#) である。これらは、サービス・ラーニングや地域参画などの教育実践や大学の社会貢献を展開しつつ、それらの取り組みを推進する大学が、過去を見つめつつ、よりよい未来を見据えて社会的・文化的な複雑さを丁寧に紐解いていることを目の当たりにした証である。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)



写真14：[Taylor Hall中庭のHiroshima Peace Tree](#)

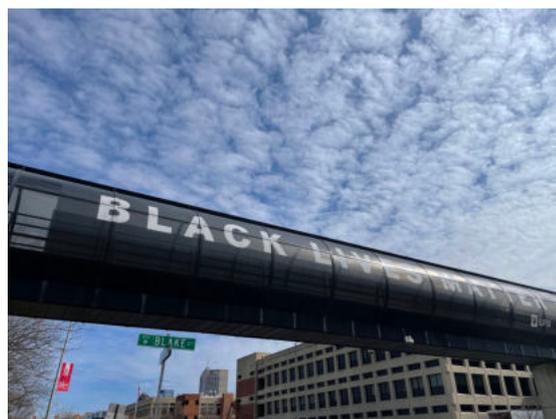


写真15：[2020年にBLMのメッセージをskywalkに掲示](#)

【引用文献】

- Latour, B. 1999. Pandora's hope. Essays on the reality of science studies. Harvard University Press. (川崎 勝・平川 秀幸(訳). 2007. 『科学論の存在——パンドラの希望』 産業図書)
- Mitchell, T. D. 2007. Critical service-learning as social justice education: A case study of the Citizen Scholars Program. *Equity & Excellence in Education*, 40(2), 101-112.
- Mitchell, T. D., Latta, M. 2020. From Critical Community Service to Critical Service Learning and the Futures We Must (Still) Imagine. *Journal of Community Engagement and Higher Education*, 12 (1), 3-6.
- Schneider, C. G. 2021. Making Liberal Education Inclusive: The Roots and Reach of the LEAP Framework for College Learning. AAC&U.

【注】

- ¹ Directorに「主任」と充てたのは、栗山先生がご自身で執筆の記事「[アメリカの教育現場から：地域社会との繋がりを目指す日本語言語教育 - IUPUI日本語プログラムの取り組み](#)」（一般社団法人海外日本人研究者ネットワーク、2022年5月21日）にて用いておられたことによる。
- ² 原文は「current trends in service-learning, including an evolution from just "service" mentality to one of "community engagement and cooperation."」である
- ³ 原文は「to foster students' readiness to connect their academic learning with the needs of the wider society, both civic and economic」である。